

## 軽度発達障害児をもつ母親への支援

The Psychological Support for Mothers of Children with Mild Developmental Disabilities

岩崎 久志\*、海蔵寺 陽子†

Hisashi Iwasaki, Yoko Kaizoji

近年、軽度発達障害への関心は高まっているが、軽度発達障害児の親に焦点をあてた研究はまだ数少ない。軽度発達障害児に対して、親は何らかの違和感や独特の育てにくさを感じていることが多く、親への支援を考える際には、親の視点を理解することが重要である。本研究では、子育てを通して親のポジティブな心理的反応を引き出すものが何かを、事例を通じて検討し、軽度発達障害児をもつ親への支援のあり方を考察した。

キーワード：軽度発達障害、親支援、ポジティブな心理的反応

### I. はじめに

平成17年4月より発達障害者支援法が施行され、軽度発達障害への関心は高まっている。同支援法では、発達障害者・児（自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥／多動性障害、その他これに類する脳機能の障害であって、その症状が通常低年齢において発現するものとして政令に定めるもの）に対する支援のみでなく、その家族に対する支援についても努力すべきことが明言された。しかし、具体的な支援内容については、まだ十分な検討がなされていない。

軽度発達障害は、身体の障害や明らかに遅れが認められる障害と違い、発達の経過から障害を理解する場合が多い。しかし軽度発達障害児の特徴的な行動は通常の子どもにも認められるものが多く、成長による変化も大きいため、親は障害であることに気づきにくい。さらに、親自身が子どもの障害を客観的に理解できずに戸惑うことも多い。

また、軽度発達障害の確定診断は難しく、障害の疑いから診断までの期間は長期に及ぶことが多い<sup>1)</sup>。この間、親は子どもに障害があるかどうか、葛藤や不安を感じ続けている。さらに診断よりも先に、発達や行動上の問題に親自身が気づいたり、幼稚園や学校などの教育機関から指摘されている場合が多いとも言われている<sup>2)</sup>。確定診断がなされた後も、対処の仕方が分からない、周囲の理解が得られないなど、親は様々な不安や葛藤を経験せざるを得ないのが実情である。

\*流通科学大学サービス産業学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

†森ノ宮医療大学 〒559-8611 大阪市住之江区南港北1-26-16

障害児を育てる母親のストレスは高いことが報告されている<sup>3) 4)</sup>が、特に発達障害児をもつ親は障害児を持つ親の中でも最もストレスが高い<sup>5) 6)</sup>。軽度発達障害児には独特の育てにくさがあり、親は戸惑いと葛藤を感じながら子育てをしている。しかし、それにもかかわらず障害に起因する子どもの行動を、周囲から母親の育て方が悪いと誤解されたり非難されたりすることで、軽度発達障害児をもつ母親は傷つき自信を失っていく<sup>7)</sup>。このような葛藤や困難の中で、親たちが実際にどのような子育て体験をしているかを知ることは、軽度発達障害児をもつ親への支援を考えるうえで重要である。

そこで本研究では、まず軽度発達障害児をもつ親が子育てを通してどのような体験をしているのかを知るために、軽度発達障害、あるいは軽度発達障害が疑われる子どもをもつ母親に対して面接調査を行った。次に各事例を通して、親のポジティブな心理的反応を引き出すものが何かを検討する。そしてさらに軽度発達障害児をもつ親に対してどのような心理的支援が必要かを考察する。

## II. 方法

### 1. 調査対象

3歳から10歳までの軽度発達障害があると診断されたか、軽度発達障害の疑いを保健センターや医療機関で指摘された子どもの母親7名を対象とした。

### 2. 手続き

調査方法は、母親を対象にした半構造化面接とし、面接の前に答えたくない質問には答えなくていいこととプライバシーの保護についての説明を行った。面接では、現在に至るまでの子育てについて強くストレスを感じたことと、その時に気持ちを立て直すきっかけとなったこと、およびその時の思いについて質問を行った（質問項目①）。

さらに、あらかじめ用意した質問項目について面接の中で語られなかった場合は、その項目についても質問を行った（質問項目②～④）。

面接に要した時間は、1人1～2時間程度を1～2回であった。面接の初めに録音することについて承諾してもらえたものは、録音後全て文字起こした。録音できなかったものは面接時に記録したものをもとに、面接後、より詳細に記録した。調査期間は、2008年5月から11月までであった。

### 3. 質問項目

①現在までの子育てで、強くストレスを感じたのはどのようなことか教えてください。また、子育てにストレスを感じているときに、気持ちを立て直すきっかけになったのはどんなことだったか、その時のお気持ちもお話ください。

②子育てにストレスを感じている時に、気持ちを前向きにしてくれた出来事や、自分の心の支え

になったのは何でしたか。

- ③日常生活のなかで、ホッとできる時間はどんな時ですか。  
④対象児を育てていて、一番よかったと感じることはどんなことですか。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 対象者及びその子どもの属性

対象となった母親7名の属性および軽度発達障害またはその疑いを有する子どもの属性について表1に示す。

表1 対象者および子どもの属性

		事例1	事例2	事例3	事例4	事例5	事例6	事例7
子ども	性別	男	男	男	女	男	男	男
	年齢	7歳	6歳	6歳	6歳	3歳	10歳	3歳
	診断	広汎性発達障害	広汎性発達障害	軽度発達障害の疑い	軽度発達障害の疑い	軽度発達障害の疑い	広汎性発達障害	広汎性発達障害
	きょうだい	兄	姉	兄	兄	兄・妹	兄	兄・妹
対象者	年代	30後	30前	30後	30前	30前	40前	30前
	職業形態	パート	主婦	主婦	主婦	主婦	パート	主婦

#### 2. 心理的負担を感じている時に気持ちを立て直すきっかけになったこと

##### a. 心理的支援（夫からの支援）

心理的負担を感じているときに母親の気持ちを立て直してくれるものとして、理解者の存在が挙げられた。理解者の存在は、すなわち心理的支援であって、母親自身の状態を理解してくれる存在と、子どもの状態を理解してくれる存在の二つに分けられる。

まず、母親の気持ちを立て直してくれるものとして、母親の気持ちや状態を理解し支えてくれる夫の存在が示された。母親の理解者として、夫の果たす役割はいくつかあるが、ひとつには母親の行動に歯止めをかけるという役割がある。「夫はいつも客観的な意見を言うしてくれる」（事例1）、「怒りすぎる私に、（夫が）『怒るのはわかるけど、言ってもわからないんだから』と言って、エスカレートしないようにしてくれる」（事例2）、「不安になりすぎてしまう私に、『大丈夫』といてブレーキをかけてくれる」（事例3）などの語りがそれを示している。次に、母親の支援をする夫の役割の二つめは、母親の気持ちを受け止め、母親の拠り所となることである。この点について母親たちは、「夫が一番の理解者で、いつも私を支えてくれる」（事例1）、「私が思ったことをわーっと言って、夫がそれについて、いいとか悪いとか言うしてくれる。何でも聞いてくれるし、私の気持ちを受け止めてくれる。」（事例7）と語っている。

そして、夫が信頼できる相談相手となることで、母親は自分の気持ちを立て直し、それらを通

して夫婦の連帯感が育まれていることが示唆された。事例1では「夫とは、子どもに対して同じ考えているようにしている。お互いの考えが理解し合えるまできちんと話し合い、二人が同じ考えに至るように、それだけは、そうしようと二人で決めている。」と夫婦間の結束の固さが語られた。また事例3では「あの子を育てるうえで一番つらかったのは、夫と意見が合わない時期だった。子どもについての考え方が合わないことで、他のことでも何かと（考え方の）違うところが目について、ケンカばかりしていた。夫と自分のことだけで精一杯で、子どものことを考える余裕なんて無かった。」と夫との不和が大きなストレスになったことを語っているが、さらに「子育てについては今も意見の食い違いがあるが、夫は子どものことをとてもかわいがっている。私とは違うけど、夫なりに良いと思うことをやっていることはわかるし、私とは違う視点があることに気づけるというか、夫が私の気持ちや考え方のバランスをとってくれていると思う。」と、夫との間に生じた連帯感が語られた。

#### b. 心理的支援（子どもの状態を理解してくれる存在からの支援）

次に、子どものことを理解してくれる存在について、「担任の先生によると『あの子は、自分がすべき事を分かっている、いつも心の衝動と戦って苦しんでいる』そうで、そんなふうに子どものことを理解して見ていてくれる人がいるのはとてもありがたい」（事例1）、「子どもがピアノを習っていて、人差し指だけで弾いたり、自分の気に入ったフレーズだけを何回も繰り返したり、全然違うことばかりするんですけど、ピアノの先生がとても分かってくさっていて、『この子は自由な心を持っている子だから、叱らないであげてね』って」（事例3）、「（母親の）母親と食事に行った時、『もっと大きい子でも、食事中に立ち歩いたり、騒いだりするのには、この子はちゃんと座っていられるし行儀良くできる』と言われて嬉しかった。子どものがんばりと自分の努力をわかってもらえたようで」（事例7）と語られている。すなわち、母親の気持ちを立て直すきっかけとして、子どもが第三者に理解されたり、評価されたりする場面が語られた。

#### c. 子どもの成長と行動の変化

子どもの成長を実感することは、母親に安心感や達成感をもたらしている。母親たちは、わが子の成長について「子どもが成長している姿をみると、ほっとする」（事例1）、「チームでサッカーをしているのを見て、こんなこともできるようになったんだと思うと、よかったあって」（事例2）、「お姉ちゃんになってきて、『好きな男の子に手紙を書く』と恥ずかしそうにするのを見るとかわい」（事例4）と、語っている。さらに「だんだん言葉で言ったら分かるようになってきたので、接しやすくなった」（事例1）、「幼稚園に入ってから自分の思っていることを伝えてくれるようになったので、やりやすくなった」（事例7）と、加齢に伴って言語でのコミュニケーションが可能となり、子どもに関わりやすくなることが示された。同様の内容は事例2、3でも語られた。

次に、親の接し方によって子どもの反応が変わり、結果的に子どもは母親が期待するような行動を取るようになることが語られている。このような変化によって母親は安心し、子どもへの理

解と親としての自信を深めている。すなわち「自分の対応を変えたら、子どもも変わるということに気づいたのは大きかった」(事例1)、「自分の接し方を変えたら子どもも変わって、こうやったらいいんだとわかると楽になる」(事例3)、「なんでこんなふうになってしまうんだろうって不思議で、腹が立って仕方なかったが、知り合いに『(子どもは)不安なんじゃないの?』と言われて、“不安を感じているんだ”と思ったら、もう愛おしくて。大丈夫だからねって抱きしめたりするようになったら、ずっと落ち着いて。私が自分の思い通りの子育てをしようとしてるだけなのかもしれない」(事例5)、「私が子どものことを理解するようになってからは、本当に穏やかで楽しそうにしている、今までは何だったんだろうって」(事例6)と語られている。

#### d. 障害の知識や対応の仕方に関する情報・同じ障害をもつ子どもの親に関する情報

事例3の母親は、幼稚園で発達相談を担当するカウンセラーから軽度発達障害児の行動特性や思考の特徴について説明を受け、気持ちが楽になったと語っている。具体的には「この子はいったいどういう状態なのかとか、どうしたらいいのか、ってというような私の疑問に答えてくれる人がいると分かって、やっと落ち着いた気がする」(事例3)と、語られた。このように障害の知識や事例といった情報が母親の気持ちを立て直すきっかけになったとする内容は事例1でも語られている。

また、軽度発達障害児をもつ他の親たちの情報も親の気持ちにポジティブな変化をもたらしている。事例6では、「インターネットが一番自分の気持ちを楽しんでくれるもので、軽度発達障害に関するサイトを見ると、『そうそう』って思えたり、悩んでるのは自分だけじゃないんだって、楽になれる」という言葉で、軽度発達障害児をもつ他の親も自分と同様の戸惑いや不安を感じているという安堵感が語られている。

#### e. 親役割から離れる時間の確保

親という役割から離れて“自分の時間”を過ごすことが母親の気持ちを立て直すひとつのきっかけとなっていた。事例1の母親は「仕事がなかったら、とてもやってこれなかったと思う。私にとって仕事は自分のバランスをとる大切なもの」と、子育てとは全く別のことに集中できる時間を持つことの大切さを語っている。また、事例4の母親は「友人とお茶をしたり、おしゃべりすること」がストレスの発散になり「自分にとって無くてはならない時間」と述べている。事例6でも同様の内容が語られた。

事例2および事例3では、子どもが興味を持っていることに母親自身も関心をもつことで新たな楽しみを見いだしている。例えば、「子どもは昆虫が好きで、一緒に図鑑を見ているうちに私も興味がわいてきて、虫ってすごく面白いんですよ。子どもに昆虫の名前とか教えてもらったりして、なんか子どもの時間をもう一回過ごしているみたいで楽しい」(事例2)、「子どもがクラシック音楽にはまっていて、この間は、オーケストラのコンサートに連れて行ったら、子どもは寝てしまったけど、私は音楽を聴いて本当にほっとできた」、「子どもがクラシックにはまらなければ、

私もクラシックを聴くことなんて無かったでしょうし、ましてコンサートに行くことなんて無かったと思う」(事例3)というように、母親が子どもを通して新たな興味を見出し、楽しんでいる内容が語られた。

## IV. 考察

### 1. 心理的支援の必要性

軽度発達障害児をもつ母親の心理的支援を考えるにあたり、夫の存在は大きな意味をもっている。これまでも、発達障害児をもつ母親にとって夫からの心理的支援は重要視されてきた<sup>8)</sup>が、本研究においてもこれを支持する結果となった。

事例3で夫との不和が大きなストレスとなったことが語られているように、自分の気持ちを理解してくれる夫の存在は、母親にとって気持ちの拠り所であり大きな意味をもつといえる。本研究では、夫が母親の気持ちを受け入れ、極端になりがちな母親の行動に歯止めをかけて気持ちのバランスをとるという役割を担っていることが示唆された。そしてこのような夫の役割が、夫婦や家族の連帯感に繋がると考えられる。

田中<sup>4)</sup>は、障害児を持つ家族では、高ストレスを示す母親は低ストレスの母親に比べ、「充実した家族の連帯感」が有意に低いことを報告している。このように家族の連帯感や夫との関係は母親のストレスと大きく関わっており、障害児の母親だけでなく、家族全体を視野に入れた支援の重要性が示唆される。

母親は子どもに対してこうなって欲しいという発達期待や良い子像を持って育児を行っている<sup>9)</sup>が、実際の生活の中ではそんなに思い通りにはならない。管野<sup>10)</sup>は、母親が不快感情を抱くのは、子どもが母親に不従順であったり、べたべたしてくるといった特定の行動をとる場合であることを明らかにした。そして、この不快感情を契機に、母親は子どもの育ちを展望し、自らの育児のやり方を振り返っていることを報告するとともに、不快感情が育児にポジティブな役割を果たしている可能性を示唆している<sup>10)</sup>。

本研究においても、「どうしてもそうなるのか分からない」、「どうしても言うことを聞いてくれない」といった否定的感情が、全ての母親によって語られた。一方で、子どもが期待通りの行動をとるか、対処に困るような問題行動をとるかは母親の対応次第であることに気づき、心理的負担が軽くなった経験も語られている。このように親たちは、試行錯誤を繰り返しながら、子どもに対する自らの対応を振り返り、子どもの特性についての理解を深めている。この時、母親の視点に父親の視点を加味することで、子どもに対する考え方やとらえ方は客観性を増す。より客観的に子どもをみられることで、母親は、心配しすぎたり怒りすぎたりする行動をコントロールできるようになる。言い換えれば、理解者としての夫との関わりを通して、母親は子どもに対する自らの対応を見直し、子どもに対する理解を深めていくといえる。

しかしながら、軽度発達障害児には独特の育てにくさがあり、母子の間に生じる期待と現実のズレは大きく、またそのズレを親は頻回に経験していると推察される。このため、親が子どもに対して抱く否定的感情はより強く、その回数もより多いことが予想される。このような状況において、管野<sup>10)</sup>の指摘通り子どもに対する否定的な感情を契機に、自らの育児について振り返るためには、十分に母親の気持ちを理解し支持するという心理的支援が不可欠といえよう。母親にとって夫の心理的支援が重要な意味をもつことはすでに述べたが、母親への心理的支援については、単に母親への心理的支援だけでなく、夫が母親の心理的支援を担えるように方向付けていくことも必要である。

次に、夫からの支援以外に、母親の気持ちにポジティブな変化をもたらすものとして第三者による子どもの肯定的側面の指摘がある。事例3では、「この子は自由な心を持っている子だから、叱らないであげてね」というピアノ教師の言葉がけによって、“自由な心を持っている子”という子どもの肯定的側面が母親に示されている。そしてこの肯定的側面の提示によって、母親の否定的感情は肯定的感情へと変化している。つまり、“指示通りにピアノが弾けない”という子どもの行動と母親の期待とのズレは、“自由な心を持っている子”という視点によって、母親の期待する子ども像と一致したと考えられる。

このように、親の期待する行動と実際に子どもがとる行動が異なるとき、子どもの肯定的側面を見つけてくれる人、すなわち子どもを受け入れてくれる存在が、親の安心感と子どもに対する肯定的感情を引き出すといえそうである。本研究では、クラス担任、ピアノ教師、母親（子どもの祖母）らによって、子どもの肯定的側面が示されている。親は子どもの否定的な面に注目しやすく、子どもの肯定的な側面には目が向きにくい。そして親であるがゆえに、その肯定的側面が評価に値するのかどうか客観的に判断することも難しい。このような事情から、親は第三者に子どもの肯定的側面を指摘してもらうことによって、それを認識し、第三者に子どものもつ一面を評価されていることで、肯定的感情が引き出されていると考えられる。

## 2. 情報提供の重要性

心理的支援の大切さもさることながら、親が子どもに対する理解を深め、子どもへの対応を工夫する際、軽度発達障害児の特性についての知識や対応の仕方に関する情報は重要である。軽度発達障害児の親は、障害が表面化しにくかったり、自閉症という障害特性が周囲から理解されづらいといった事情もあり、わが子の障害について、周囲に対して理解や支援を求めることに消極的<sup>11)</sup>であることが多い。

事例にみられたように、インターネットでの知識や情報の収集は現代社会のひとつの特徴と言えるが、インターネットからは非常に多くの多様な知識や情報を入手でき、問題場面での対処行動や、子どもの行動の予測もしやすくなる。また事例で語られたように、軽度発達障害児をもつ他の親の気持ちや状況を知ることは、親の不安や孤独感を軽減する一助となる。これらは親にとっ

て大きな希望となりうる。インターネット上の情報は、膨大であると同時に思いこみや勘違いといった類のものも含まれているという一面もあり、良い面ばかりとは言えない。しかし実際に母親の不安が軽減され、また問題場面で親の対処の仕方が変われば、子どもの反応や行動にはおのずと変化が現れ、親は子育てに自信を感じられるようになる。

氏家・高濱<sup>12)</sup>はこの点について、些細な変化であっても本人がそれを大きく肯定的に受け取ったことにより、良い状態を次々と生み出す相互強化が生じるようになる、と述べている。また、林<sup>13)</sup>は育児行動に自信を持つことにより、親が同じ意図で行った行動でも、子どもへの伝わり方が異なるとして、親が育児に自信を持つことの重要性を示している。彼らが指摘するように小さな変化を肯定的に受け止めることを繰り返すことで、親は子どもの成長を実感し、子育てへの自信を積み重ねていくのではないだろうか。そして、そのことこそが子どもとの信頼関係を築くといえよう。

親子の信頼関係は、軽度発達障害児をもつ親にとって非常に大切な視点であり、親への支援を考えるうえで重要なポイントとなる。換言すれば、軽度発達障害児をもつ親への支援は、親子の信頼関係の構築と親の子育てへの自信の形成を支援することといえよう。具体的には、子どもの肯定的側面と成長の示唆、子どもへの対処行動と理解に関する情報提供などによる支援が考えられるが、何よりも、親が意識しないような小さな変化や肯定的側面を見逃さず、そこに親の目を向けさせる支援が求められる。

### 3. 親役割から離れる時間を確保する必要性

当然のことながら、母親が親役割から離れて自分の時間を持つ必要性は、軽度発達障害児をもつ母親だけに言えることではない。しかし障害児の母親は健常児の母親に比べ、高いストレスを感じていることが指摘されており<sup>15)</sup>、他の障害に比べても自閉症児を持つ親のストレスが高いという知見が得られている<sup>5) 6)</sup>。この結果について蓬郷ら<sup>16)</sup>は自閉症児のコミュニケーションの困難さや社会性の問題が母親のストレスを増大させているとし、身体面・生活面だけでなく母親の精神的負担感の大きさが指摘できると考察している。このように、軽度発達障害児をもつ母親が感じているストレスの高さを考えると、母親のメンタルヘルスを保つにはストレスの軽減が不可欠といえよう。

親たちが感じているストレスを軽減するには様々な対処法略が考えられるが、子どもから離れる時間の確保は、単調な生活と孤独感から心理的に距離をとるひとつの方法といえよう。牧野<sup>14)</sup>は母親が子どもから離れて自分の時間を持ち、やりたいことを楽しむことが、育児不安を少なくし、さらには子どものより良い発達を望む上でも欠かせないことであると述べている。このように、子どもから離れて過ごす時間の確保が大切であることは他の研究でも示されている<sup>17)</sup>が、軽度発達障害をもつ乳幼児を養育中の母親は、育児や他の雑事に時間を取られ自分の時間を楽しむような時間的余裕のない場合が多い。

本研究では、時間的余裕のなさをうまく利用し、子どもと共に過ごしながら、自分の時間を楽しんでいる母親の事例が見られた。事例2では子どものために出かけたクラシックコンサートが自分の憩いとなり、事例3では子どものために昆虫という興味を共有したことが、自分の楽しみとなるなど、子どものためにと考えてとった行動が、いつしか自分のためになり、母親にポジティブな心理反応を引き起こさせている。

子どもを預けて乳幼児家庭教育学級に参加し学習することの母子への影響と、学級に参加することと育児不安との関連について調査した牧野<sup>17)</sup>によると、「子どものため」と思って始めた学習が「自分のため」になっていることに気づいた母親が多く、「自分のため」と感じている人に育児不安の少ない人が多いとされている。「自分のために」と感じられる行動や時間の確保は母親の育児不安に影響を与える要因であろうが、時間的余裕のない母親にとって、自分のためだけに時間を使うことには抵抗を感じる場合が多いのではないだろうか。しかし本研究の事例のように「自分のため」でもあるが「子どものため」でもあるという状況をつくれれば、さほど抵抗を感じずに“自分の時間”が確保できると思われる。

自分のために費やす時間という意味合いとはやや異なるが、親役割から離れる時間としては就労のための時間も含まれる。櫻谷<sup>18)</sup>は母親の育児不安について調べ、母親が有職者であるほうが、専業主婦よりも育児不安が低いことを指摘されている。櫻谷によると、職業を持って働く母親は子どもから離れる時間があり、大勢の人が一緒に子どもを育ててくれているという気持ちが、育児不安を少なくさせているという。軽度発達障害児の親は、障害の特性から育児の責任をすべて自分だけで抱えがちになるが、育児を離れる時間をつくることで、他の人と一緒に子どもを育てるという経験が生じ、育児に対する考え方にも余裕が生まれると思われる。

このようなソーシャルサポートに加え、職業を通して母親が自己実現を図ることは、心理的負担を軽くし母親のメンタルヘルスとともにアイデンティティにも影響を及ぼすと推察される。藤原<sup>19)</sup>は、障害児の母親が日常生活の大部分を子どものこと、そして子どもに繋がる関係の中で生きるその一方で、母親は自分はどう生きるかということに関して、これまで以上に主体的に考え始めていると述べ、積極的に自己実現を模索する母親の存在を指摘している。

## V. おわりに

本研究では、軽度発達障害児をもつ親への支援について、親のポジティブな心理的反応を中心に検討した。だが、7事例と事例数が少なく、支援の有効性に関する実証という意味では、まだまだ不十分であることは否めない。今後、より事例数を増やして検討することが必要である。さらに軽度発達障害児の親だけでなく、健常児や他の障害を持つ親との比較検討を行い、軽度発達障害児をもつ親が真に求めている支援を明らかにすることが求められる。また、親の適応のプロセスを詳細にたどり、その時期ごとの親の心理的状态や支援のニーズを検討することも今後の課

題であるといえる。

最後に、本論文を作成するにあたり、ご協力いただいたお母様方に心よりお礼申し上げる次第である。

#### 引用文献

- 1) 中田洋二郎：「親の障害の認識と受容に関する考察－受容の段階説と慢性的悲哀－」、『早稲田心理学年報』27 (1995) 83-92.
- 2) 杉山登志郎：「第2章診断 第2節早期診断を巡る問題」, 杉山登志郎・辻井正次編『高機能広汎性発達障害－アスペルガー症候群と高機能自閉症－』（ブレーン出版 1999）47-54.
- 3) 蓬郷さなえ・中塚善次郎：「発達障害児を持つ母親のストレス要因（2）－社会関係認知とストレス－」, 『小児の精神と神経』29, 1,2 (1989) 97-107.
- 4) 田中正博：「障害児を育てる母親のストレスと家族機能」, 『特殊教育学研究』34, 3 (1996) 23-32.
- 5) 新美明夫・植村勝彦：「学齢期心身障害児をもつ母親のストレスについて－ストレスの構造－」, 『特殊教育学研究』18, 4 (1981) 59-68.
- 6) 新美明夫・植村勝彦：「学齢期心身障害児をもつ父母のストレス－ストレスの背景要因－」, 『特殊教育学研究』3, 2 (1985) 23-34.
- 7) 松下真由美：「軽度発達障害児をもつ母親の障害受容過程についての研究」, 『応用社会学研究』13 (2003) 27-52.
- 8) 相浦沙織・氏森英亜：「発達障害児をもつ母親の心理的過程－障害の疑いの時期から診断名が就く時期までにおける10事例の検討－」, 『目白大学心理学研究』3 (2007) 131-145.
- 9) 清水弘司・前中央子・松永顕子・依田明：「幼児を持つ母親の「よい子」「よい母親」「よい父親」概念」, 『家庭教育研究所紀要』15 (1994) 33-43.
- 10) 菅野幸恵：「母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ」, 『発達心理学研究』12, 1 (2001) 12-23.
- 11) 浅倉和子：「自閉症（傾向）・軽度知的障害児の母親の主観的困難（たいへんさ）と当事者による対処戦略に関する研究」, 『東京家政学院大学紀要』48 (2008) 71-78.
- 12) 氏家達夫・高濱裕子：「3人の母親－その適応過程についての追跡的研究」, 『発達心理学研究』5, 2 (1994) 123-136.
- 13) 林隆：「発達外来における発達障害児の親支援」, 『小児科臨床』61, 12 (2008) 341-347.
- 14) 牧野カツコ：「乳幼児を持つ母親の生活と「育児不安」」, 『家庭教育研究所紀要』3 (1982) 34-56.
- 15) 新美明夫・植村勝彦：「就学前の心身障害児をもつ母親のストレス－健常幼児の母親との比較－」, 『発達障害研究』3, 3 (1981) 47-56.
- 16) 蓬郷さなえ・中塚善治・藤居真路：「発達障害児をもつ母親のストレス要因（Ⅰ）」, 『鳴門教育大学学校教育研究センター紀要』1 (1987) 39-47.
- 17) 牧野カツコ：「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」, 『家庭教育研究所紀要』9 (1987) 1-13.
- 18) 櫻谷真理子：「今日の子育て不安・子育て支援を考える－乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通

じてー」, 『立命館人間科学研究』 7 (2004) 75-86.

- 19) 藤原里佐: 「障害児の母親の生活構造にみる特質と変化」, 『教育福祉研究』 7 (2001) 15-26.